

# 奥原碧雲『竹島及鬱陵島』の和歌の特徴

伊藤政彦\*

(e-mail : shinkiku@hanmail.net)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 奥原碧雲と島根県調査団の調査について
  3. 奥原、中井らの独島/竹島に対する認識
  4. 『竹島及鬱陵島』寒潮余韻の和歌
    - (1) 岩根
    - (2) 天皇および国家
    - (3) 統治の既成事実化とアシカ猟既得権の確認
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

1904年(明治37)9月29日に隠岐・西郷居住の中井養三郎がアシカ漁の独占を企図して内務、外務、農商務の三大臣宛てに「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」を提出し、これが受理された。折しも日本はロシアと戦争中であったが日本政府は島根県に意見聴取のための照会を発し、島根県からの上申にもとづいて改めて内務大臣から閣議に提案され、1905年(明治38)1月28日に閣議決定された。

この閣議決定は1905年2月15日付で内務大臣から島根県知事に訓令され、島根県知事は2月22日付の島根県告示第40号で同島とその所管について告示している。

こうして日本政府の閣議決定を受けて島根県が同島を編入した年の翌年である1906年(明治39)3月末に、島根県知事松永武吉の命令により島根県第三部長事務官の神西由太郎が45名から成る視察調査団を率いて同島を訪れた。一行は漁業、農業、衛生、測量な

---

\* 우송정보대학 관광일본어과 조교수 일본문학

ど多くの専門家を加えた調査団であった。そしてこの際に調査団に同行した当時八東郡秋鹿村尋常高等小学校長の奥原碧雲が執筆し、1907年(明治40)5月8日に出版したのが『竹島及鬱陵島』である。<sup>1)</sup>

同書は奥原碧雲が自身の調査や視察員の復命書、隠岐島庁の文書、独島/竹島<sup>2)</sup>におけるアシカ漁の中心人物であった中井養三郎の談話等をもとに写真や地図を交えつつ同島の地理、気候、生物、漁業、漁民生活の状況、沿革を記し、次いで「海波漸く高く、天候稍不穩の徴」があったという理由で寄港することになった鬱陵島の地理、気候、生物、商業貿易、交通、住民、教育、政治、土地、本邦移住民、沿革などについても紹介している。そして末尾には付録として「竹島渡航日誌」と「寒潮余韻」が収録されている。前者は碧雲がこの時の渡航調査の日程や出来事、感想などを日記風にまとめた文章であり、後者は碧雲をはじめとする視察員等の和歌、漢詩および俳句を集めたものである。そしてこの「寒潮余韻」の詩歌には調査報告書的な性格をもつ本文に比べて視察員らの個人的な感懐や心情がより強く反映されていると思われる。

本稿ではこの時の調査の概要について見るとともに、上述の「寒潮余韻」に収められている和歌に対する考察を通じて、当時の視察調査参加者らの独島/竹島及び鬱陵島に対する認識の一端を明らかにしてみたい。

## 2. 奥原碧雲と島根県調査団の調査について

『竹島及鬱陵島』を著した奥原碧雲の経歴については、必ずしも一般に広く知られているとは言えないであろう。従って、ここではまず碧雲がどのような人物であったのかを『島根県大百科事典』などに依って見てみたい。

碧雲は1873年(明治6)4月1日に島根県秋鹿郡岡本村(現在の島根県松江市岡本町)で奥原米之助・きえの長男として生まれた。本名は福市で碧雲は号である。碧雲の家は

- 1) 同書出版の経緯については碧雲自身が記している通り、調査2ヶ月後の1906年(明治39)5月には成稿していたが、追加調査の必要や碧雲の韓国および中国への旅行、神西事務官の長野への転任、印刷所の変更などにより遅延し、1907年(明治40)5月に松江市の報光社から発行されている。本稿では2005年刊の復刻版(松江市、ハーベスト出版)を参照した。
- 2) 現在日本で「竹島」、韓国で「独島」と呼ばれている島の呼称は歴史的に複雑な変遷を遂げてきたが、堀和生(1987)によると軍艦新高の1904年(明治37)9月25日付の日誌に「松島ニ於テ『リアンコルド』岩実見者ヨリ聴取リタル情報」として「『リアンコルド』岩韓人之ヲ独島ト称シ本邦漁夫等畧シテ『リヤンコ』島と呼称セリ」とあって同島は1904年以前から韓国で「独島」と呼ばれていたことがわかる。一方、日本の「竹島」という呼称は上述の1905年(明治38)1月28日の日本政府閣議決定において「此際所屬及島名ヲ確定スルノ必要アルヲ以テ該島ヲ竹島ト名ケ」とあって1905年1月に確定したものである。従って本稿では書名および史料引用部分を除き、呼称使用の時間的先後を勘案して該島を「独島/竹島」と呼ぶこととする。

代々農業を生業としていたが、教育者を志して1890年(明治23)9月1日に島根県尋常師範学校に入学、1894年(明治27)4月16日同校を卒業して飯石郡三刀屋尋常高等小学校の訓導となり教育者としての第一歩を踏み出した。1896年(明治29)には秋鹿村尋常小学校の校長となった。そして1904年(明治37)に秋鹿村立実業補修学校が新設されるとその学校長も兼任した。さらに1922年(大正11)に村立秋鹿女子技芸学校を創設して学校長となった。また1903年(明治36)以来図書館の創設に努力し、秋鹿図書館、八束図書館の司書、館長ともなっている。

このように碧雲は小学校教育はもとより青年補習教育、女子教育および社会教育の各方面にわたって活躍した教育家として知られている。そして、こうした教育上の実績に対して1914年(大正3)には文部大臣から小学校教育功績状を受けている。また1919年(大正8)には島根県知事よりシベリア出張を命ぜられて約1カ月間にわたり教育、文化、政治、経済の各方面について視察している。

その一方で碧雲は多芸多趣味の人であり、文才もあったことから多くの論説、紀行文、随筆、詩歌などを残している。著書も多く、主要なものとしては『島根県名勝誌』『八束郡秋鹿村誌』『島根めぐり』『八束郡誌』などがある。<sup>3)</sup>

さらに郷土研究にも関心が深く明治時代後半から昭和のはじめにわたって地方新聞や雑誌に掲載された篤志家の史論、随筆、紀行文、視察談、文学、美術、工芸に関する研究等を収集していたが、これらの資料が1932年(昭和7)より島根県教育会から『郷土資料島根叢書』として刊行されている。

そして奥原碧雲は若いころには新体詩詩人、新詩社の歌人としても活躍していた。『文庫』『明星』などに短歌、新体詩、紀行文を掲載し、歌会「しのめ会」を結成した。また地方文芸誌『ミチシホ』『銀鈴』や地方紙などにも精力的に作品を発表し、明治30年代(1897～1906頃)の山陰文壇を代表する詩文家、歌人であった。<sup>4)</sup> 1902年(明治35)初めに行なわれた新詩社の地方支部の再編に際しては与謝野鉄幹の知遇を得ていた出雲国八束郡秋鹿村の碧雲(奥原福市)方に出雲支部が設置されたほどであった。<sup>5)</sup> 歌人・詩人としての碧雲の文学的性向は『竹島及び鬱陵島』にも反映されており、上述のように同書には付録「寒潮余韻」として26首の和歌、漢詩、俳句が収められていて、これらの詩歌のうち8首が碧雲の和歌である。

さて、碧雲が『竹島及鬱陵島』を編纂するきっかけとなった島根県調査団による独島/竹島調査は1906年(明治37)3月末に行なわれたが、次にこの時の調査の日程、概要、碧雲の行動などを『竹島及鬱陵島』付録の「竹島渡航日誌」をもとに見てみたい。

3) 島根県大百科事典編集委員会ほか編(1982)『島根県大百科事典』上巻 山陰中央新報社。p.322

4) 山陰中央新報社編(1997)『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社。pp.144-145

5) 明石利代(1979)『「明星」の地方歌人考』(笠間叢書134)笠間書院。p.29

1906年3月22日、独島/竹島視察員の神西由太郎第三部長と東文輔隠岐島司以下10余名が汽船第三境丸に乗って松江を出発、午後0時40分に境港着、引野旅館に投宿、諸般の準備をするうちに残員が同日最終の汽船にて到着し、一行は同日は境港で宿泊した。

23日午前5時40分に第二隠岐丸(240t)に乗って境港を出発、午前11時40分に隠岐の西郷港へ到着、隠岐島庁はじめ地元有志者の出迎えを受けながら隠岐島後に上陸。同日午後6時に独島/竹島へ向けて出発する予定とのことで碧雲は同宿の島根県立師範学校の雪吹敏光教諭、島根県農事試験場の小林技手とともに西郷近郊を散策、午後3時半に宿に戻るが、天候不良を以て出発が延期されたことを知らされる。

24日、花売りの少女の声で目を覚ました碧雲はこの日の出船予定時刻が午後6時と聞いて小林技手、松陽新報の吉田行精記者と島根県農事試験場八田分場、国分寺旧跡を見学して玉若酢神社に参詣した。午後3時に宿舎に帰ったが、この日も天候不良のため独島/竹島行きは延期となった。

25日、朝から霞が降っていたが、しばらくすると晴れ間が見えた。しかし松江税務監督局の吉田平吾局長一行と船で御岬山へ向かうと空がかき曇り、雨が降りだし風も強まった。そして午後2時に宿に帰った一行を待っていたのはこの日も独島/竹島への出発が延期されたとの報であった。同日の夜、島根県庁の中島善夫技手に「竹島漁獵会社」の中井養三郎を紹介され、独島/竹島の状況を聞く。碧雲は中井の熱意に感じ入っている。

26日、午後6時に独島/竹島へ向けて西郷港を出発。

27日、「竹島が見える」との声に目を覚ます。無数の海鷗が波上に乱飛し、数千の海驢が岩頭に群集していた。端船を下ろして神西事務官が漁夫の一群とともに西嶼に上陸、次いで一行も上陸した。西嶼の調査を終えて東嶼へ渡り、神西事務官、東島司以下8名はその頂上まで登った。各方面の調査が終了したので一同は船に帰り、独島/竹島を一周しながら撮影を行なった。「海波漸く高く、天候稍不穩の徴」が見えたので一先ず鬱陵島に避難することになる。午後2時半に独島/竹島発。鬱陵島亭洞に午後9時に着き仮泊した。神西部長以下数名は道洞に上陸、残員は船内で夜を明かした。

28日、午前9時に端船に乗り道洞に一同上陸、鬱陵島駐在の日本警官及び日商組合の斡旋により在留邦人の私宅に分かれて休憩。午前10時、神西部長以下10数名は通訳とともに「鬱島衙門」に郡守沈興澤のもとを訪れた。神西部長は訪問の由来を述べ独島/竹島で捕獲した海驢一頭を贈った。庁前にて記念撮影をし、次いで土商議所を訪問して所長金光鎬、顧問由在恒に面会する。午後1時から一部は乗船して鬱陵島を一周し、一部は島にとどまって各種調査を行なった。午後8時10分道洞を出発、船は独島/竹島を左に見て西郷へ直航した。

29日午後4時、西郷港着。隠岐の有志による慰労の宴会が持たれた。

30日午前10時、一行は隠岐島庁玄関前で記念撮影、用務のある神西部長と中島技手

を残し残員は西郷港を出発、午後4時に境港に到着し、汽船蓬莱丸に乗り換えて午後7時に松江に帰着した。

### 3. 奥原、中井らの独島/竹島に対する認識

『竹島及鬱陵島』の記述からは奥原碧雲が江戸時代における鬱陵島出漁などの「対外的発動」あるいは「対外的経営」は積極的な冒険であって善であると認識していたことがわかる。碧雲は同書のうち元禄時代の竹島一件について述べた部分で、日本人の気質について「生来、進取の氣象に富み、負けず魂を有せる海国男児(同書p.21)」とする一方で、鬱陵島への渡航を禁止した江戸幕府の政策については「優柔軟弱なる徳川幕府の外交政策(p.26)」と非難している。更には鬱陵島に密航した浜田浦の会津屋八右衛門および暗にその計画を翼賛した浜田藩主松平周防守については

ああ、海国の冒険児八右衛門は、有為の企図を抱きて空しく刑場の露と消え、英主松平周防守また永蟄居の身となる。世を挙つて昇平無為に馴れ、凡庸徒らに跋扈するの時幕府は更に全国一般に命令を下して、対外的発動の萌芽を根底より芟除せんと企てたり。(『竹島及鬱陵島』 p.25)

と嘆いている。このように碧雲は対外膨張＝善という価値観を持っていた。こうした対外膨張は近代においては帝国主義的な海外侵略という形であられるのであるが、その一方で独島/竹島については碧雲は『竹島及鬱陵島』で

水路誌はこの岩嶼発見を外国船に委して顧みず、剩へ、日韓両国沿岸よりの距離は、日本の方十湮の近距離なるに、海図には朝鮮の部に編入せられしが如き、遺憾の極といはざるべからず(p.18)

とし、また

爾来石州沿岸の人、また渡航を企てしも、幕府の禁制にあひ、天保以来数十年間、竹島(引用者注:鬱陵島)は殆んど本邦人に忘却せられしより、リアンコール列岩は、自然旧記の竹島にあたるものと誤認せられ、而して、竹島は既に元禄中より朝鮮の版図と認められし故、リアンコール列岩をも朝鮮の版図と認むるに至れるなり。(中略)(アンカ)競争濫獲の結果、種々の弊害を認めたる中井養三郎氏はリヤンコ島を以て朝鮮の領土と信じ、同国政府に貸下請願の決心を起し(p.27)

と述べている。要するに明治時代当時の海図には独島/竹島が朝鮮の部に編入されており、それは元禄の竹島一件で江戸幕府が日本人の鬱陵島への渡海を禁止、その後旧記の竹島(鬱陵島)と松島(独島/竹島)の存在が忘れられて両島に対する認識に混乱が生じ「リアンコール列岩」が朝鮮の版図と考えられるようになった。中井も同島を朝鮮の領土と考えていたため大韓帝国政府に貸下請願しようとしたというのである。

このように碧雲は独島/竹島の日本領土編入以前には同島が朝鮮の版図である可能性について認識していた。こうした認識は碧雲の他の著述、例えば「竹島沿革考」(1906)や『島根県誌』(1923)、『隠岐島誌』(1933)でも同様であることが先学により指摘されている。<sup>6)</sup>

独島/竹島の領土編入の契機となる同島貸下願を出した中井養三郎の認識について更には言えば、碧雲が中井の生い立ちや貸下げ出願の経緯などについて綴った「竹島経営者中井養三郎氏立志伝」においても

海図によれば、同島は朝鮮の叛図に属するを以て、一旦外人の来襲に遭ふも、これが保護をうくるの道なきを以て、かかる事業に向かつて資本を投するの頗る危険なるを察し、同島貸下を朝鮮政府に請願して、一手に漁獵権を占有せんと決心し<sup>7)</sup>

としてここでも中井が同島を朝鮮の版図に属するものと考えていたことを紹介している。

中井が同島の貸下を官に求めようとした理由は1903年(明治36)から開始していたアシカ猟の独占と「事業ノ安全、利源ノ永久」(「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」)を確保するお墨付きを得るためであり、それは碧雲の言葉を借りれば「一攫万金の夢」(「竹島経営者中井養三郎氏立志伝」)という個人的利益の追求が目的であった。そして中井は同島が朝鮮の領土である可能性があるを知りつつも、貸下申請は日本政府に対して行なわれた。領土編入は一旦は内務官僚の反対により頓挫しそうになったが、それを押し切る形で、関係のある一方の当事者たる大韓帝国政府の存在を無視したまま一方的に行なわれたのであった。そして貸下願提出の直接の契機となったのは上述のように中井が自身らのアシカ猟における既得権を確保したいとの欲求であった。

#### 4. 『竹島及鬱陵島』 寒潮余韻の和歌

さて『竹島及鬱陵島』には巻末に付録「寒潮余韻」として詩歌が収められており、こ

6) 内藤正中(2000)『竹島(鬱陵島)をめぐる日朝関係史』多賀出版, pp.167-168など

7) 竹島問題研究会(2007)『竹島問題に関する調査研究』最終報告書 島根県総務部総務課, p.3

これらの詩歌について碧雲は「竹島視察員の詩歌を輯めたるもの」と注記している。その内訳を見ると和歌が20首ともっとも多く、次いで漢詩が4首、俳句が2句で、全部で26の作品が収録されている。作者別に見ると碧雲の和歌が8首、風流学士の和歌が10首、香雨の和歌が2首、渡辺春披の漢詩が1首、神西逸山の俳句が2句となる。そしてここには島根県の独島/竹島視察調査団員の作品だけではなく韓国鬱陵島士商議所長の金光鎬の作とされる漢詩2首、および鬱島郡守沈興澤が賦したとされる漢詩1首も含まれているが、それらのうち、和歌は以下の20首である。

黎明、境港を解纜す

- しのめ
- 1 灯台のとし火ややにうすれゆきて浪よりあくる黎明の空。 碧雲8)  
あさもや こ あま
- 2 朝靄のはれゆくなべに二つ三つ散るや木の葉の海人のつり舟。 同
- 海上、元弘の昔を忍びて
- 3 天が下道しなければ暫しとて八重の汐路を辿りましけん。 風流学士
- 4 あら磯にちる白浪を花と見て都の春やしのびましけん。 同
- 5 遷幸の昔おもへばおきの島浪のしぶきに袖ぬれずやは。 碧雲
- 八田分場にいたる途上にて
- 6 春寒し田の畔つたひ若菜つむ八田少女が謡のやさしき。 同  
くろ はった うた
- 7 風寒しおきつ島根は春ながら鹿の子まだらの大満寺山。 同  
か こ
- 某望楼長に
- 8 大君の御稜威いたらぬ隈もなし八重の汐路の限なければ。 風流学士  
み い ふ くま
- 西郷を発して竹島に向ふ
- 9 夕映の名残の雲の紫やひとすぢうすき島前のやま。 碧雲  
ゆふぼえ どうぜん
- 竹島にて
- 10 竹島は名のみなりけり来て見れば神代なが岩のみにして。 風流学士  
あじか
- 11 波の色も巖の色も見えぬまで海驢むれ居る新竹の島。 同
- 12 北の海や大高汐の高なりに万古動ぜぬ岩根たけしま。 碧雲  
おほたかしほ ばんこ どう
- 13 白浪のよせて砕くる岩かどに眠りむさぼる海驢のひとむれ。 同  
み ち
- 大海戦の当時をおもひやりて
- 14 今もなほ勝鬨あぐる心地して浪音たかし竹島のおき。 風流学士
- 鬱陵島を辞せんとする時

8) 「寒潮余韻」の和歌には便宜上、掲載の順序にしたがって引用者が1番から20番まで番号を付した。

- 15 白檀びやくだんのしげきいはねに春の月おぼろにかをる道洞どーとんの村。 風流学士  
東島司の航海安全を焼火社に祈願されしをききて
- 16 国の為渡る航路の安かれとたく火の神にたゞ祈るかな。 同  
海上静穏なりければ
- 17 守りけんたく火の神のみ心のままに和ぎぬる今日の海かな。 同  
手銭楼慰労会の席上、東島司に
- 18 隠岐の島またも来て見ん島といへど都耻みやこはちらふ花の咲く島 同  
某氏の竹島行をおくりて
- 19 春寒き海へやさしの君やりて船幸ふなさち祈る子ありとおぼせ 香雨  
みち しきよー
- 20 海驢みちの子の夢驚かすたはむれにたまたま君が詩興しきよー助けん。 同

『竹島及鬱陵島』は独島/竹島と鬱陵島の調査報告書的な性格を持っており、その本文は当然ながら個人的な感情、感懐よりは客観的な内容を記述することが志向されているであろう。その一方、和歌には例えば『古今和歌集』の仮名序に「やまと歌は人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける(和歌というものは人間の心を種にたとえと、そこから生じて口に出た無数の葉のようなものである)」とあるのを見てもわかるように、より個人的な感懐や心情が強く反映されていると推測される。ここでは「寒潮余韻」の和歌に対する考察を通じて調査参加者らが独島/竹島に対しどのような認識を持っていたかを見たい。

## (1) 岩根

まず碧雲の詠んだ次の和歌にはどのような認識が表れているだろうか。

- 12 北の海や大高汐の高なりにおほたかしほ 万古動ばんこぜぬ岩根どーたけしま

歌意は「北の海の高い波にも大昔からずっと動かなかった岩根竹島よ」というものであろう。ここで碧雲は独島/竹島を「万古動ぜぬ岩根」、つまり「大昔から動くことのない岩」と認識している。周知のように同島は二つの岩の塊のような島から構成されているが、碧雲自身も

本島は、元リアンコール列岩(Liancourt)と称し、東西二個の岩嶼と、数十の小嶼とより成り、東嶼に(ママ)海拔二百二十六尺、西嶼は三百八十一尺、突兀として海面に屹立し、両嶼相隔ること僅に三町<sup>9)</sup>



種をまいたのであろう(それ故にしっかりと根を張った松はわが君の齡の永遠に連れ添うてめでたい姿を見せていることだ) 14) という意味である。また、村上天皇の40歳を寿ぐために歌われた平兼盛の

273 山階の山の岩根に松を植へてときはかきはに祈りつる哉(『拾遺和歌集』巻第5 賀歌)

という歌の「ときはかきは」は上でも見たように「常磐堅磐」で「常磐」は永遠に変わらない岩、「堅磐」は堅固で変わらない岩を指す。全体の歌意は「山階山のどっしりと大地に根を下ろした岩に松を植えて、我が君(村上天皇)の長久不変を祈ることだ」15) となる。天皇の治世の長久を祈って堅固なる岩の上に常緑の松を植えたことを歌っているのである。

このように伝統的な和歌のイメージにおいて「岩根」「岩根松」はがっちり安定した岩と、その上の常緑の松ということで、千載万代を寿ぐもの16) であるとともに、堅固永遠の天皇の治世を喩えるものであり、これらの歌は天皇の治世の長久を予祝する歌であると考えられる。同様のことが碧雲の上引の歌にもあてはまるのではなかろうか。

ここで注目すべき点は島根県の視察調査団のうち神西事務官および東島司をはじめとする8名が1905年3月27日に独島/竹島の東嶼の絶巔に登りそこに松の木を植えているという事実である。そのときの様子については碧雲も『竹島及鬱陵島』の渡航日誌の中で簡単に触れているが、旅行者某生は「竹島渡航日記」(5)で次のように記している。

さて絶頂にある人を数へて見たならば神西事務官東島司岡崎岡雪吹中井松浦和泉の八氏であつたよく／＼諸君は登られたと感心の至りであつた海とは異なつて岡君の元氣はなか／＼であつたが松を採つて紀念の爲めに植えられた17)

独島/竹島東嶼の頂上に島根県の視察調査団員が松の木を植樹したことはまさに上で見た「岩根松」を想起させるものであって、この行為は天皇の御代の永遠を祈り象徴すると同時に、独島/竹島に対する確固たる領有の確認をし、さらには天皇による同島の統治の永遠を祈り予祝する意図があったと見ることができるのではなかろうか。

## (2) 天皇および国家

和歌史を繙けば天皇の御代の永遠を予祝するなど天皇と関連のある歌は少なくないが、「寒潮余韻」の和歌にも天皇と関係する作品がいくつか見える。風流学士が「某望楼長

14) 片野達郎・松野陽一校注(1993)『千載和歌集』(新 日本古典文学大系10) 岩波書店. p.189

15) 小町谷照彦校注(1990)『拾遺和歌集』(新 日本古典文学大系7) 岩波書店. p.78

16) 片桐洋一(1999)『歌枕歌ことば辞典』(増訂版) 笠間書院. p.60

17) 1906年(明治39)4月12日付『山陰新聞』(第6312号)第1面

に」と題して詠んだ次の歌もそうである。

8 大君の御稜威みいふいたらぬくま隈もなし八重の汐路の限なければ。

この歌に見える「潮路」とは潮が流れる道筋、または船が通う道のことを指す。18) また「御稜威」の「稜威」は「巖」とも書かれ、古代においては「いみ清めた、神聖な、尊厳な、勢いの激しい、勢い盛んに繁る」ことを表わして「いつ◎◎」「いつの◎◎」といった形で使われることが多かった。19) 時代が下ってそこに「御」がついて「御稜威」となり、「御威勢」「御威光」を指すようになったものである。

東アジア各国には古くから自国を中心とする小中華思想があったが、近世日本における日本型華夷意識の中核をなしたのは「日本は神国」との意識であった。そして豊臣秀吉は自国を「日本弓箭きびしき」武威の国として「大明の長袖国」に対置したが、その武家の国家を守護する理念が「神国」意識であった。20) 上記の歌でいうところの「御稜威」は大君、すなわち天皇の「すぐれた威徳や強い力あるいは影響力」を指しており、その御稜威、威光とは近世以来の自国を武威の国すなわち武力の秀でた国とみる観念とも無縁ではないであろうし、武力を背景にした膨張に繋がっていく思想であって、この歌は独島/竹島の編入もそうした武力を背景にした御稜威によるものであることを示唆している。

さて、上引の歌では天皇の威徳や影響力が及ばないところがない、隅々までゆきわたるとし、その理由が「八重の汐路の限りなければ」、つまり海上を船で行く道に限りがないからであるとしている。

このような考え方を敷衍させれば、海というものが全世界に広がり、つながっているものである以上、当然のように天皇の威勢はアジア全体、さらには全世界に及び、また広がりうるものと考えられるであろう。そしてこうした考え方はのちに第二次世界大戦中に喧伝された「大東亜共栄圏」、すなわち欧米諸国の植民地支配からアジア諸国を解放して日本を盟主とする共存共栄の国際秩序を構築しようとする理念や、天皇の威光のもとに全世界を一つの家となすとする「八紘一宇」の考え方につながってゆく思想である。

この歌は独島/竹島へ出発する前に隠岐で詠まれたものであるが、隠岐はもちろんのこと、歌意からすればこれから訪れる予定の独島/竹島も天皇の御稜威のもとにあると考えていることは明らかである。同島の島根県への編入もこのように天皇の威勢のもとに行なわれた一種の帝国主義的な海外膨張の一環と調査団員が考えていたことが示唆されており、それは当然なことと考えられ、この歌からは領土編入に対する作者の疑問はまったく感じられない。次に

18) 久保田淳・馬場あき子編(1999)『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、p.422

19) 上代語辞典編集委員会編(1992)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、p.81

20) 朝尾直弘(2004)『朝尾直弘著作集』(第5巻)岩波書店、p.86

東島司の航海安全を焼火社に祈願されしをききて

16 国の為渡る航路の安かれとたく火の神にたゞ祈るかな。

17 守りけんたく火の神のみ心のままに和ぎぬる今日の海かな。

という2首の歌について見ると、東島司とは独島/竹島視察員の一員であった隠岐島司の東文輔のことであり、焼火社は隠岐島前にある隠岐第一の霊山「焼火山」所在の神社である。焼火山はその名の示す通り「火」と関係のある山であり、古代には隠岐軍団と本土の山陰道鎮撫使を結ぶ烽(とぶひ)の一中継地点でもあり同時に、<sup>21)</sup> 古くから海の民の間における「焼火信仰」の中心であった。焼火信仰とはすなわち海上で遭難しそうになった時に焼火の神に祈ると、この焼火山の神の靈験により神火が示現し、その方向に向かって船を進めれば難を逃れ無事に港に入ることができるという信仰である。

東島司は航海の安全を焼火社に祈ったのであるが、ここで注目されるのは冒頭にある「国の為」という表現であろう。島根県の独島/竹島調査が国のために行なわれたということはすなわち島根県による独島/竹島編入も他でもなく「国のため」に行なわれたという事実を当事者たちが自覚していたことを示している。そしてその国とは上述の「御稜威」をそなえていたとされた天皇の統治する国であった。ここでは調査団員たちの帝国主義的対外膨張の尖兵となったことに対する使命感や一種の誇りが表現されていると見ることもできよう。次に

大海戦の当時をおもひやりて

14 今もなほ勝鬨あぐる心地して浪音たかし竹島のおき。

という風流学士の歌について見てみたい。ここで「今もなほ勝鬨あぐる心地して」というのは詞書にもあるように上でみた海戦における日本海軍の勝利を素材に詠まれた歌である。

独島/竹島周辺海域は日露戦争において日露両国艦隊の決戦場となった。特に1905年(明治38)5月28日にはこの海域でロシアの戦艦ニコライ一世、戦艦アリヨール、装甲海防艦セニャーヴィン、装甲海防艦アブラキシンの4艦が独島/竹島南南西約18海里の地点で降伏している。風流学士の歌は同島の沖で波音を聞きながら、この時の海戦の際の日本海軍の軍人らの勝利の叫び声を思い出しているのである。日露戦争における日本の勝利と独島/竹島が結び付けられて詠まれた歌である。しかしこうして勝利に酔いしれるばかりで、調査団員らはそうした戦果の背後で日露国交断絶以前に日露開戦の場合の局外中立を宣言をしていたにもかかわらず自らの意志に反して戦場となり<sup>22)</sup>、日本によって国権を奪われつつあった韓国に対し「おもひやりて」歌を詠む余裕はまったくなかった。

21) 田中豊治(1979)『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院. p.81

22) 姜万吉著・小川晴久訳(1986)『韓国近代史』高麗書林. p.205

では、このほかの詩歌はどうであろうか。「海上、元弘の昔を忍びて」との題詞のもと載せられている碧雲と風流学士の次の3首について見てみることにする。

- |                             |      |
|-----------------------------|------|
| 3 天が下道しなければ暫しとて八重の汐路を辿りまけん。 | 風流学士 |
| 4 あら磯にちる白浪を花と見て都の春やしのびまけん。  | 同    |
| 5 遷幸の昔おもへばおきの島浪のしぶきに袖ぬれずやは。 | 碧雲   |

題詞の「海上」とは島根県調査団一行の船が境港から隠岐へ向かうその海上を指す。そして「元弘の昔」とは後醍醐天皇が隠岐に流された1332年(元弘2)のことを指している。

後醍醐天皇は1324年(正中元)に鎌倉幕府打倒を企図したが計画が事前に露見して失敗、さらに1331年(元弘元)にも倒幕計画を企てたが天皇の身を案じた吉田定房が鎌倉幕府に通報したことからまたもや事前に計画が発覚、天皇は翌年3月に隠岐に配流となったのである。このとき後醍醐天皇は島根県調査団と同じく出雲から隠岐へ渡ったのであった。その時の様子について『太平記』は次のように描写している。

さる程に、先帝は出雲の三尾の湊に十余日御逗留ありて、風穏やかに波閑まりければ水主・梶取纜を解いて、御船を艤す。兵船三百余艘、前後左右に漕ぎ双べて、北溟を指してぞ出でたりける。大洋海上鯨波に航して、巨帆風に任せたる事なれば、蓬萊弱水の外、鳳麟洲、珊瑚洲の方までも、行きもやせんずらんと、御心細くぞ思し食されける。時に滄海沈々として、西日、西北の波に没り、雲山迢々として、西月、東南の天に出づ。漁舟の帰る程打ち見えて、一灯柳岸に明らかなり。暴風起れば梶を下し、蒼波穏やかなれば、纜を解いて、嶋伝い浦伝いに隠岐に出でんとする程に、暮るれば芦岸の煙に船を維ぎ、明くれば松江の風に帆を揚げ、すべて関山に風雨を凌ぎ、波路に日数を重ねぬれば、帝都を御出あつて二十六日と申すに、御舟すでに隠岐国に付きにけり。(『太平記』巻第4 隠州府嶋皇居の事)<sup>23)</sup>

このように元弘の昔に隠岐に配流された後醍醐天皇の苦難に風流学士と碧雲は思いを致しているのである。風流学士の1首目は「海の上には道がないので天皇は潮の路をお通りになったのであろう」、2首目は「後醍醐天皇は荒磯に砕ける白い波頭を花とご覧になって京都の春を偲ばれたことだろう」との意であろう。3首目の碧雲の作品の歌意は「後醍醐天皇が隠岐に流された昔のことを思うと海辺の波のしぶきに袖が濡れないことはあろうか、波のしぶきだけでなく涙が出てきてその涙をぬぐう袖が濡れることだ」という意味になるであろう。後醍醐天皇の苦難を思うとおいたわしくて涙がこぼれるというのである。いずれの歌にも天皇をい

23) 長谷川端校注・訳(1994)『太平記』①(新編日本古典文学全集54)小学館, pp.228-229

たわしく思う心が表われている。

碧雲の後醍醐天皇に対する関心は隠岐での風待ち中の3月24日に島後の国分寺を訪れて「後醍醐天皇の行在所は必定この地なるべし、と懐古の情に耽」ったとしている点にも表われているが、上掲の和歌3首に表れているのは一言で言えば後醍醐天皇に対する同情であろう。

また付言すれば、こうして不遇であった天皇に思いを馳せてその魂を慰める一種の鎮魂の歌を詠んだことは古くから和歌に期待されていた機能を勘案するならば、<sup>24)</sup> 自身たちの独島/竹島視察の無事と所期の目的達成を祈る意図があったと見ることもできるであろう。

### (3) 統治の既成事実化とアシカ猟既得権の確認

次に視察調査団の一員であった風流学士が独島/竹島を訪れた際に詠んだ歌を見てみよう。

竹島にて

10 竹島は名のみなりけり来て見れば神代なが岩のみにして。

まずここに引用した歌は、4句目の部分が字足らずとなっていて不審である。このままでは歌意も取りにくい。しかし全体的な意味が通るように推察してみるならば4句目と5句目の「神代なが岩のみにして」は、もともとは「神代ながらの岩のみにして」ではあったと考えられるのではないだろうか。このように考えると歌意も通り、自然であろう。

もしそうであるとすれば、和歌史を繙いて見ると実際に「神代ながらの」という表現を含んでいる歌が少なからずある。それは例えば次のような歌である。

百首歌めされけるとき

945 天の戸のあけし月日もかはらぬは神代なからの光なりけり 後醍醐院(『新千載和歌集』巻10 神祇歌)

新玉津島社三十首歌に

447 あきらけき光そことにすみのほる神代なからの山のはの月 祝部成光(『新続古今和歌集』巻第4 秋歌上)

「ながら」は「動作や状態がそのまま続いている、または人や物などの状況・様子などについてそっくりそのまま」という意を表わす助詞であり、現代語では「～のまま」「そのまま」となるであろう。ではこれらの歌に見える「神代」とはどんな時代なのであろうか。単純には神の時代を指すが、古く「神代」とは

24) 伊藤政彦(2009)「隠州視聴合紀の名所和歌」『日本文化学報』42, 韓国日本文化学会. pp.293-294

神々の時代、太古・大昔の意に用いられ、天地開闢以来、神々が国土を経営し、よ  
 ずのこの基礎を固めた時代と考えられている。記紀の年代にのっつていえば人皇紀以前  
 の神話時代をさす。25)

と考えられていた。つまり「神代」とは「神が日本の国土を経営していた時代」のことであ  
 る。上引の歌で詠まれている「神代ながらの光」は「神が日本を治めていた時代と変わら  
 ないそのままの光」、「神代ながらの月」は「神が日本を統治していた時と変わらないそ  
 のままの月」となるであろう。

それでは独島/竹島で詠まれた風流学士の歌に戻って考えてみると、もし「神代なが岩の  
 みにして」が「神代ながらの岩のみにして」であったとするならその歌意は「竹島というの  
 は名前だけであった、実際に来てみると(島というよりは)神々が日本の国土を経営していた時代  
 と変わらないそのままの岩があるばかりであった」となるであろう。ここでいう「神」は言うま  
 でもなく日本という国を生んだイザナギノミコト・イザナミノミコトなどの神々を言うのであり、こ  
 うした文脈からすると独島/竹島もかつて悠久の昔に日本の神の手により国生みによって誕生し、  
 その後はそれらの神によって統治されていたという思想がこの歌の背後にあったと見ることが  
 できよう。

この歌の作者風流学士は独島/竹島が新たに日本の領土に編入されたとは言っても、古く  
 神の時代から変わることなく日本の神により統治支配されていた島と考えているのであり、外  
 国の領土としての認識はまったく感じられない。独島/竹島の領有を自明の既成事実として認  
 識しているとも見ることができよう。また「神代ながらの岩」という表現には上で見たような永久  
 不変の岩根を指すとともに永遠なる天皇の御代のイメージも含まれていよう。さて、次に同じ  
 独島/竹島で詠まれた

11 波の色も巖の色も見えぬまで海驢あしかむれ居る新竹の島。

13 白浪のよせて砕くる岩かどに眠りむみちさぼる海驢のひとむれ。

という歌について考えてみたい。前者の風流学士の作品の歌意は「波の色も岩の色も見え  
 ないほど海驢が群れている新竹島」、後者の碧雲の作品の歌意は「白浪がよせて砕けて  
 いる岩の角に眠りを貪っている海驢の一群れ」となるであろう。

独島/竹島周辺には古くから多数のアシカが棲息していたが、当時とくに同島には非常に  
 多くのアシカが棲息しており、上でも言及したように中井養三郎が1904年(明治37)9月29日  
 に内務、外務、農商務の三大臣宛てに「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」を出したのも

25) 上代語辞典編集委員会編(1992)『時代別国語大辞典上代編』三省堂, p.220

同島におけるアシカ漁の独占を目的とするためであった。独島/竹島周辺に棲息していたアシカは日本では「ニホンアシカ」と呼ばれ、学名は「*Zalophus californianus japonicus*(Peter, 1866)」という。成獣のオスは全身暗褐色で、体長はおよそ230～250cm、メス成獣の体色はオスより淡色で、体長は164cm余、オス成獣の体重はおよそ450～560kgであり、基亜種カリフォルニアアシカ(*Z. c. californianus*)よりも大型であるとされている。分布区域は九州長崎港以北の沿岸域や鬱陵島、独島/竹島、隠岐島からサハリン南部まで、大陸沿岸では豆満江河口、太平洋側では九州宮崎市大淀河口以北、北海道から千島、カムチャッカ半島南端まで棲息の記録がある。<sup>26)</sup>

さて、「寒潮余韻」の和歌に見える「海驢」は第2首目では「アジカ」、第4首目では「ミチ」と訓まれているが、いずれも上述のニホンアシカを指し、古くは「みち」と読まれていた。すなわち『日本書紀』神代下、第10段に

是時、海神自迎延入、乃鋪設海驢皮八重、使坐其上。(神代下第10段一書第三)

と見え、これに対する訓注として

海驢、此云美知 (神代下第10段一書第三)

としていることから「海驢」が「ミチ」と訓まれたことは明らかである。『古事記』上巻にも

即於内率入而、美知皮之疊敷八重、亦、繩疊八重敷其上、坐其上而<sup>27)</sup>

とある。これについて『古事類苑』所引の『古事記伝』十七之巻には

美智ノ皮、書紀に海驢と作て、此云美知とあり、釈に海馬也と注し、(海馬は漢名なり、海驢海馬等皮毛在塗地、皆候風潮、則毛起)口決には、海驢之皮在陸、而潮満則自起毛とのみ云て、其物のさまは云ず、建長八年百首に衣笠内大臣、我恋は海驢の寐流れ寤やらぬ夢なりながら絶やはてなむ(夫木集に出ヅ)<sup>28)</sup>

としているが、ここに見える衣笠内大臣の歌が注目される。海驢は群れをなして海辺で休むので「よく眠ること」のたとえにされたといい、<sup>29)</sup> この歌でも「海驢の寝流れ」すなわち

26) 環境省自然環境局野生生物課編(2002)『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物』1哺乳類 財団法人自然環境研究センター. p.46

27) 権五嘩・権静畚(2007)『古事記』上巻 高志園. p.333

28) 神宮司庁編(1980)『古事類苑』動物部(復刻版) 吉川弘文館. p.470

海上で眠りながら潮に流されることが歌われている。歌意は「私の恋は海驢が眠りながら流れているときの覚めやらぬ夢のようなものだ。夢のように果てて終わってしまうのだろうか」となるだろう。海驢の眠りを貪る習性については本居宣長がやはり『古事記伝』十七之巻で

紀国人の云く、今紀の海に阿志加と云物あり、其処にて昔より字には海馬と書き来レルよし、日高ノ郡の海中に阿志加嶋と云嶋のあるに、年毎の秋冬ころ、多く来て、岩ノ上に睡り、又波ノ上に浮びなあらも熟睡て、凡て寤ることの遅き物なり<sup>30)</sup>

としていて、波の上に浮かびながらも寝て、なかなか目を覚まさないものとして述べている。さて、上掲の碧雲の歌に詠まれた波の色も岩の色も見えないほど多数のアシカが眠りを貪っている姿はそこが平和な状態であることを意味していよう。ではなぜ平和なのかと言えば島根県への編入によって天皇の天下に入ったからであり、或いは神代に国生みによって誕生した同島が、島根県への編入によって本来あるべき状態になったため平和なのだと碧雲らは考えていたのではないか。またアシカについて言及していることは同島とアシカ猟とが不可分の関係にあることを示している。改めて編入が中井らのアシカ猟の利益独占を目的として挙論せられたことが想起せられる。

## 5. おわりに

以上、奥原碧雲『竹島及鬱陵島』の巻末に付された「寒潮余韻」の和歌に対する検討を試みた。本稿で考察した結果は以下の通りである。

まず、日本の伝統的な和歌において「動くことのない岩」というのは特別な意味を持っており、古くから不動の岩根と天皇の永遠の治世は関係が深いものとして考えられていた。さらにこの「岩根」に「松」が加わって「岩根松」となると、がっちりと安定した岩の上の常緑の松ということで、千載万代を寿ぐものであるとともに、堅固永遠の天皇の治世を喩えるものである。従って12首目の碧雲の歌は天皇の治世の長久を予祝する歌としての意味をも内包していたと考えられる。また実際に1906年の視察調査団員のうち8名が3月27日に独島/竹島の東嶼の絶巔に登り、そこに松の木を植えている。独島/竹島東嶼の頂上に島根県の視察調査団員が松の木を植樹したことはまさに上で見た「岩根松」を想起させるものであって、この行為は天皇の御代の永遠を祈り象徴すると同時に、天皇による独島/竹島の統治の永遠を祈り予祝する意図があったと見ることができよう。

29) 相賀徹夫編著(1989)『日本大百科全書』1 小学館. p.284

30) 大野晋編『本居宣長全集』第10巻 筑摩書房. p.252

次に「大君の御稜威いたらぬ隈もなし八重の汐路の限なければ」という8首目の風流学士の歌には海が全世界に広がりつながつているものである以上、当然のように天皇の威勢は全世界に及び、広がりうるものという考え方が窺える。こうした思想はのちに第二次世界大戦中に喧伝された「大東亜共栄圏」や「八紘一字」の考え方につながってゆくものであり、独島/竹島の島根県への編入もこのように天皇の威勢のもとに行なわれた帝国主義的な海外への膨張の一環と調査団員が考えていたのではないかということを示した。

また「国の為渡る航路の安かれとたく火の神にたゞ祈るかな」という16首目の風流学士の歌からは、調査参加者がこの時の視察調査を「国の為」と考えていたことがわかり、「今もなほ勝鬨あぐる心地して浪音たかし竹島のおき」という14首目の風流学士の歌は、当時の日本人が日露戦争における日本の勝利と独島/竹島を結び付けて考えていたことを示している。

次に3首目の「天が下道しなければ暫しとて八重の汐路を辿りましけん」（風流学士）、4首目の「あら磯にちる白浪を花と見て都の春やしのびましけん」（風流学士）、5首目の「遷幸の昔おもへばおきの島浪のしぶきに袖ぬれずやは」（碧雲）からは天皇、ここでは特に後醍醐天皇に対する関心と強い同情の心が表れている。

次に調査団員が独島/竹島を訪れた際に詠んだ歌である10首目の「竹島は名のみなりけり来て見れば神代なが岩のみにして」（風流学士）、12首目の「北の海や大高汐の高なりに万古動ぜぬ岩根たけしま」（碧雲）という歌からは独島/竹島もかつて神の時代に日本の神の手による国生みによって誕生し、その後はそれらの神によって統治されていたという思想がこの歌の背後にあったと見ることを指摘した。つまり、風流学士は独島/竹島が新たに日本の領土に編入されたとは言っても、古く神の時代から変わることなく日本の神により支配されていた島と考えているのであり、外国の領土としての認識は感じられない。

さらに、同じく独島/竹島で詠まれた11首目の「波の色も巖の色も見えぬまで海驢むれ居る新竹の島」（風流学士）と13首目の「白浪のよせて砕くる岩かどに眠りむさぼる海驢のひとむれ」（碧雲）という歌でアシカについて言及しており、同島とアシカ猟とが不可分の関係にあることを示している。

中井養三郎は領土編入並びに貸下願の提出に先立って独島/竹島を韓国の領土と考えており、日本政府の内務省当局者もまた同様であった。奥原碧雲もそのことを充分承知していた。しかし、以上で見た「寒潮余韻」の和歌には領土編入後に視察員らがそうした事実を目を向けた痕跡はまったくない。むしろ天皇の御稜威を背景にした「対外的発動」の一環として、もう一方の当事者たる韓国の存在を無視したまま行なわれた領土編入の正当化と、既得権の一方的な確認という性格が表れていることを否定できないであろう。

## 【参考文献】

- 権五嘩・権静畝(2007)『古事記』上巻 고즈윈. p.333
- 崔長根(2009)「『竹島経営者中井養三郎氏立志伝』의 해석오류에 대한 고찰」『독도 영유권 확립을 위한 연구』영남대학교 독도연구소.
- 明石利代(1979)『「明星」の地方歌人考』(笠間叢書134)笠間書院. p.29
- 秋山虔(2000)『王朝語辞典』東京大学出版会. p.48
- 朝尾直弘(2004)『朝尾直弘著作集』(第5卷)岩波書店. p.86
- 相賀徹夫編著(1989)『日本大百科全書』1 小学館. p.284
- 池内敏(2005)「近世から近代に到る竹島(鬱陵島)認識について」『日本海域歴史大系』(第四卷近世篇I)清文堂出版. p.67
- 大野晋編『本居宣長全集』第10巻 筑摩書房. p.252
- 奥原碧雲(1933)「竹島沿革考」『郷土資料島根叢書』第二篇 島根県教育会. pp.137-138
- 奥原碧雲(2005)『竹島及鬱陵島』ハーベスト出版. p.80 (1907年刊の復刻版)
- 片桐洋一(1999)『歌枕歌ことば辞典』(増訂版)笠間書院. p.60
- 片野達郎・松野陽一校注(1993)『千載和歌集』(新日本古典文学大系10)岩波書店. p.189
- 川上健三(1996)『竹島の歴史地理学的研究』古今書院.(復刻新装版) p.212
- 環境省自然環境局野生生物課編(2002)『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物』1哺乳類 財団法人自然環境研究センター. p.46
- 姜万吉著・小川晴久訳(1986)『韓国近代史』高麗書林. p.205
- 久保田淳・馬場あき子編(1999)『歌ことば歌枕大辞典』角川書店. p.422
- 倉野憲司・武田祐吉校注(1970)『古事記・祝詞』(日本古典文学大系1)岩波書店. p.391
- 小町谷照彦校注(1990)『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系7)岩波書店. p.178
- 山陰中央新報社編(1997)『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社. pp.144-145
- 島根県大百科事典編集委員会ほか編(1982)『島根県大百科事典』上巻 山陰中央新報社. p.322
- 上代語辞典編集委員会編(1992)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂. p.90
- 神宮司庁編(1980)『古事類苑』動物部(復刻版)吉川弘文館. p.470
- 竹島問題研究会(2007)『竹島問題に関する調査研究』最終報告書 島根県総務部総務課. pp.65-73
- 田中豊治(1979)『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院. p.81
- 内藤正中(2005)『竹島(鬱陵島)をめぐる日朝関係史』多賀出版. p.168
- 内藤正中(2006)「竹島の領土編入をめぐる諸問題」『北東アジア文化研究』第24号, 鳥取短期大学北東アジア文化総合研究所. pp.8-11
- 内藤正中・金柄烈(2007)『史的検証竹島・独島』岩波書店. p.88

- 長谷川端校注訳(1994)『太平記』①(新編日本古典文学全集54)小学館. pp.228-229
- 堀和生(1987)「一九〇五年日本の竹島領土編入」『朝鮮史研究会論文集』24,朝鮮史研究会. pp.106-107
- 1906年(明治39)4月12日付『山陰新聞』(第6312号)第1面

## 要 旨

本稿では奥原碧雲が1906年3月の島根県調査団に参加したのちに著わした『竹島及鬱陵島』の巻末付録「寒潮余韻」の和歌を通じて見ることのできる団員らの独島/竹島に対する認識について考察した。

1905年の独島/竹島の島根県への領土編入の直接的な契機となったのは隠岐在住の中井養三郎による同島貸下願であったが、中井らは当時の海図の記述などから同島が韓国の管轄にあるものと考えていた。

ところが1906年3月の島根県調査団員により詠まれた「寒潮余韻」の和歌には、このような事実を意図的に忘却したかのように、天皇の御代の永遠を祈ると同時に、天皇による同島の統治の永遠をも祈り予祝する意図が表れていると見られる作品が収録されている。また同島の島根県への編入が天皇の威勢(御稜威)のもとに行なわれた帝国主義的な海外への膨張の一環と調査団員が認識していたことがこれらの和歌からわかる。

また当時の日本人が独島/竹島と日露戦争における日本の勝利を結び付けて考えていたことと、天皇、特に後醍醐天皇に対する関心と強い同情の心が表れている歌も収められている。更には独島/竹島がかつて神の時代に日本の神の手による国生みによって誕生し、その後はそれらの神によって統治されていたという思想がその背後にあったと見ることができる作品も収録されていた。そして歌の中でアシカについて言及していることは同島とアシカ猟とが不可分の関係にあることを示していることを指摘した。

上述のように中井養三郎は領土編入並びに貸下願の提出に先立って独島/竹島を韓国の領土と考えており、日本政府の内務省当局者もまた同様であった。『竹島及鬱陵島』を著わした奥原碧雲もそのことを充分承知していた。しかし、以上で見た「寒潮余韻」に収録された和歌を見ると、領土編入後に視察員らがそうした事実に向けた痕跡はまったくない。むしろ天皇の威勢を背景にした「対外的発動」の一環として、もう一方の当事者たる韓国の存在を無視したまま行なわれた領土編入の正当化と、既得権の一方的な確認という性格が表れていることを否定できないであろう。

キーワード：奥原碧雲、『竹島及鬱陵島』、独島/竹島、寒潮余韻、和歌、領土編入

투 고 : 2010. 5. 31

1차 심사 : 2010. 6. 12

2차 심사 : 2010. 6. 26